

組織目標評価報告書（平成22年度）

部局名： 農学部

組織目標		達成状況(成果)
(下記3項目について、特に目標とする客観的指標がある場合は、数値データを引用して記載してください。)		
教 育	<p>(1)平成18年度に開始したコース制で初めての卒業生を平成21年度に出したので、アンケート等を参考に学部教育の改革を進め、改善を図る。</p> <p>(2)平成20年開講の内閣府提案の「地域活性化システム論」を継続開講し、「農家体験実習」など学生と社会との交流を深め、そのような社会的活動に対して新たな修了認定(仮:農学実践コース)を行うことを検討する。</p> <p>(3)農学部フェア、収穫祭における学生支援を積極的に行なう。平成20年開始の保護者との懇談会を引き続き開催し、改善を図る。</p> <p>(4)成績不振学生に対する担任・指導教員の指導を引き続き徹底し、留年生の減少を目指す。</p> <p>(5)農学部教員が中心となる国際教育プロジェクトを積極的に推進し、日本人学生の積極的な海外への活動を支援するとともに、優秀な留学生の確保を目指す。</p> <p>(6)学部学生に学部業務の補助を担当させ、経済的支援の一助とすることを検討する。</p>	<p>(1)平成21年度卒業生のアンケートをまとめたが、教育改善のため継続的にアンケートをとることにした。また、アンケートの回収率を向上するため、回収方法を変更した。さらに、資源植物科学研究所と協議して学生教育に関する改善を行なった。</p> <p>(2)「地域活性化システム論」を開講し、学内外から参加を得て、学生の社会に対する興味を向上させた。県と協同で「まきばの実習」を実施することになった。学生の社会活動を評価する方法を検討した。</p> <p>(3)農学部フェア、収穫祭を支援するとともに、保護者との懇談会を開催し、学生教育に対する意見を交換し、教育・学生支援の改善の参考とした。</p> <p>(4)成績不振学生に対する支援を引き続き行なった。また、卒業論文作成に関して学生への支援体制を整えた。</p> <p>(5)「生物多様性に関する国際連携教育研究の創生に向けた学術交流促進」(学長裁量経費プロジェクト)による国際連携教育を実施するとともに、「アジアの持続的生物資源開発と保全を促進する指導者養成プログラム」(日本学生支援機構、JENESYSプログラム)によりASEAN諸国の優秀な留学生の確保を目指した。</p> <p>(6)数名の学生を非常勤職員として雇用し、附属山陽圏フィールド科学センターにおける休日の苗管理業務を担当させ、経済的支援を実施した。</p>
	達成度:	
研 究	<p>科学研究費補助金、受託研究費など外部資金獲得に向けた積極的な取組みを図ると共に、学部内外における共同研究を推進させる。特に、現資源植物科学研究所(H22年度から資源植物科学研究所)との共同研究などの取組みを進展させる。また、これまで実施してきたアジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流を進展させるとともに、アジア・アフリカ関連の共同研究や共同プログラムの実施を推進する。</p> <p>一方、地域においては学部内に設置されたNPO法人「中四国アグリテック」を通しての産学官研究のさらなる展開を図る。</p>	<p>主な達成状況は以下のとおり。</p> <p>(1)ケニア・ジョモケニアアツタ農工大学との交流実績を基盤に、資源植物科学研究所に協力し、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業実施した。</p> <p>(2)7月1日に岡山大学、岡山県、農林水産省中国四国農政局、岡山県農業協同組合中央会の4者により「農業とその関連分野に係る包括連携協定書」が締結された。本協定の基に設置された産学官連携推進協議会には農学部長が参加し、2月4日には「くだもの王国おかの魅力」と題したセミナーを開催した。本包括協定に基づき「岡山大学農学部と岡山県農林水産総合センター森林研究所が実施する共同研究等に関する覚書」が9月30日に取り交わされ、共同研究を拡大した。岡山県農林水産センターの各研究所とは、岡山県の外部知見活用型・産学官連携研究事業による計3件の共同研究を農学部教員が参画して実施した。</p> <p>(3)昨年年度締結した「岡山大学農学部と岡山県真庭市との連携協力に関する協定」に基づき共同研究の準備を開始し、来年度から実施する予定である。</p> <p>(4)3月3日に資源植物科学研究所と合同で研究交流会を開催し、共同研究の紹介を含め研究発表・討議を行った。</p> <p>(5)11月24-26日と12月8日に千葉並びに岡山で開催されたアグリビジネス創出フェア2010に参加し、それぞれ6件の研究成果を発表した。</p> <p>(6)卓越した研究成果の一つとして松浦准教授が日本学術振興会賞及び学士院学術奨励賞を受賞した。</p>
	達成度:	
社 会 貢 献	<p>農学部附属山陽圏フィールド科学センターの活動を通じた地域貢献をさらに進め地域農業の活性化に貢献する。</p> <p>教育項目に記載した「地域活性化システム論」と「農家体験実習」による人的交流を通じて地域活性化に教職員・学生が積極的に関与する。</p> <p>グッドジョブ支援センターとの連携を中心に「農業による福祉的雇用の促進」「福祉的農業の確立」のためのプロジェクトを進める。</p>	<p>「新しい公共」の創生と農学の果たすべき役割をテーマとして第9回農学部公開シンポジウム「農学と地域活性化」を開催するとともに、「地域活性化システム論」、「地域農業技術論」などを開講して地域農林業との繋がりを深め、その発展と活性化に向けた働きかけを強めた。</p> <p>山陽圏フィールド科学センターでは、グッドジョブ支援センターとの連携によって「農業における障害者雇用モデル」構築に向けた取り組みを進めるとともに、市民向け公開講座「家庭菜園のツボ2010」、ジュニア公開講座「ブドウ'ピオーネ'の房作り体験」を実施し、農業・農学に関する情報を学外へ広く発信した。</p> <p>また、上記「研究欄」に記述した4者協定の取り組みの一環として、9月2日に岡山県南部の果樹栽培の現状と課題について現地調査を実施し、本学の果樹を専門とする教員が栽培等に関わる指導を行った。</p>
	達成度:	
評 価 の 客 観 的 指 標 ・ 定 義	事 項	定 義 (抜 粋)
	学部入試倍率	評価年度の前年に実施した入試と評価年度に実施した入試の志願倍率 算出方法:前期入試,後期入試,AO入試及び推薦入試毎及び各入試の合計により算出した「志願者÷募集人員(小数点3位を四捨五入)」の数値
	大学院充足率	評価年度と評価年度の翌年度の充足率 算出方法:4月入学者の「入学生数÷入学者数(小数点3位を四捨五入)」の数値。
	留年・休学・退学者数	評価年度と評価年度の翌年度の留年・休学・退学者数 留 年:正規の在学年数を経過したにも関わらず卒業延期となっている者
	就職率	評価年度のデータが揃わないこと等が想定されるため、比較可能な直近3年程度の推移・傾向から判断する。
	科研費申請率, 科研費採択率, 採択金額	
	共同研究件数, 受託研究件数, 受入金額	評価年度の前年と評価年度に実施しているとして公表した共同研究及び受託研究件数, 受入金額
<p>【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点等を記載してください。</p> <p>全ての分野において、副学部長、附属山陽圏フィールド科学センター長を中心に教職員が組織レベルで対応できたことは、学部として誇れる。来年度以降は農学部担当教員の定員削減から補充へと踏み出すので、その人的資源を有効に活用できるような組織レベルでの提案を新学部長室として計画発案されることが大いに期待される。特にフィールドを利用した本来の農学教育・研究の充実をさらにはかかっていくことが望まれる。</p>		

【達成度】 4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせ設定した領域・指標により修正してください。